

『勉強する』ということ

校長 辻村 大智

四日市西高校は普通科高校として創立40年目を迎えました。これまでに本校で学び、卒業された方は14,527名に及びます。本年3月に卒業した皆さんの進路状況は、約69%が4年制大学、約10%が短期大学、約18%が専門学校、そして就職、その他が約3%となっています。また、国公立大学へは34名の方が合格を果たしました。ここ数年、4年制大学への進学希望者が増加し、本校の「自主・自律を旨とし、地域から信頼される活力ある進学校」を掲げた教育活動が、定着してきた結果と言えましょう。

さて、皆さんにとって「勉強する」ということはどういうことなのでしょう？

このような言葉を耳にしたことはありませんか？「期末考査が終わったからもう勉強しなくてよい」あるいは「進路が決まったからもう勉強しなくてよい…」等々。実は私自身高校生の時に思ったことがあります、また今も皆さんとの会話の中で耳にすることがあります。この『…だから勉強しなくてよい』という感覚はどこからくるのでしょうか。

「勉強」特に試験勉強や受験勉強は、色に例えるなら何色でしょう？ 私が大学受験する頃はよく「灰色」と言われました。私たちはともすれば勉強は苦しいものと思いこんでしまいがちです。特に受験勉強などは、点数や偏差値を上げることをのみを目的化してしまいがちで、実際そうになってしまうと大変です。自分のためにというより、誰かにやらされている。そんな感覚に支配され、自分の前途や可能性の広がり胸を躍らせる前に、目の前の点数のみが関心ごとになってしまいます。私自身もこのような状況に陥り、苦痛のようなものを強く感じつつ「せねばならない」との思いで取り組んでいたのも事実でした。(…しかしそのような類の勉強でさえも、全く意味のないものとは言い切れません。私も含め、かつて辛い受験勉強を経験した多くの方が、全く「ない方がいい」などと思っているわけではなく、どこかで何かの役に立っていると思っているのも事実ですが…。)

ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英さんが、ある新聞誌上の対談で、高校生から投げかけられた質問に対して次のように答えています。「『勉強』という日本語は苦しみを強いるという意味、…英語の『Study (スタディ)』には知る楽しみという意味がある。自分の専門を見つけるということは努力しなくても集中できることを見つけることだと思う。探せば絶対に見つかる」と。「自分で見つけた自分のやりたいことは、知らずのうち集中することであり、そこにどれだけ時間とエネルギーを傾けたとしても、それは楽しみであり苦勞ではない、ましてや苦痛などではない。」ということですね。

勉強は、誰のためでもなく、自分のためにするものです。そして、自らの生き方を創造するために続けられる営みでもあります。自分の目標や夢を実現するために今の勉強がある。至極当たり前のことですが、このことを腑に落とせるかどうかポイントです。どうか「勉強」を試験や受験のための勉強という考え方だけに特化しないでください。でき得るならば学ぶ喜び、わかる楽しさを実感できる、「薔薇色」の受験勉強をしたいものです。「何のために」を明らかにしつつ、その先にある世界に想いを馳せ、先ずは、大学や上級学校への進学等、進路決定のために必要な「勉強」に効果的に取り組めるよう、この資料が皆さんの良きナビゲーターとして活用されることを願います。